

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

January 1
2022

常滑焼を次の千年へ！
〜40年目のとこなめ陶の森資料館





常滑焼を 次の千年へ！

40年目のとこなめ陶の森資料館

この秋リニューアルオープンしたとこなめ陶の森資料館が面白い。
大人も子供も楽しめる魅力いっぱい施設に
生まれ変わったわが町のミュージアムへ、さっそく出掛けてみよう。

常滑焼の千年を辿る旅へ

昨年から長期休館に入っていたとこなめ陶の森資料館が、リニューアル作業を終えて令和三年(二〇二二)十月十六日にオープンした。前身の常滑市民俗資料館が開館してからちょうど四十年、節目のタイミングに満を持してのリニューアルである。「つながる千年、ひろがる千年、暮らしの中で生きる常滑焼」というコンセプトのもと、館内は見事に一新された。それでは、新しい資料館を御案内しよう。

館内に入り、まず来館者を出迎えてくれるのは、受付窓口の先にある円形のエントランスホール。窯の内部を模したこのホールはオープン当初からあったが、リニューアルにあたってプロジェクターが導入され、焚口から天井のドームにかけてメラメラと燃える炎が映し出されるようになり、より窯らしさを増した。プロローグにふさわしい演出に気分も高まる。

このホールを抜けると展示室に続く通路が伸びており、ここから早

くも展示が始まる。通路の壁に沿って甕がずらりと並び、説明書きや図版がコンクリートの壁に印刷されたように掲示されている。以前も甕は並んでいたが、背景がいささか殺風景で、あまり目を引く感じではなかった。ところが今回はコンクリートの質感がうまく生かされ、なかなか格好よくなっているのではないか。奥の展示室のブロック壁も同様で、これはラッピングバス（絵や文字を印刷したシート状のフィルムで車体を包んだバスのこと）と同じ技法を用いているとか。

見栄えのよさは一目瞭然だが、内容はどうかだろう。プロローグは「常滑焼と風土」と題して、知多半島はどこか、なぜ常滑焼が生まれ、一大産地として発展していったのが簡潔明瞭に解説されている。六古窯のひとつとして全国区の知名度を誇る常滑も、初めて訪れる人にはどんな土地なのかなかなか掴めないだろうし、地元住民である私たちも、改めて問われると即答できないかもしれない。展示を見る前に、そこをまず知って

おいてもらおうという意図だろう。展示の本編は、常滑焼が始まったとされる12世紀からスタートする。西暦1100年代を皮切りに、百年単位でその時代の常滑焼の状況が解説され、その時代に対応した大型製品が置かれている。一つずつ眺めていると、いつの間にか展示室に入っており、1900年代に入ると土管や井戸筒（※）、焼耐瓶など市民には見慣れた製品が登場する。1950年代のコーナーにあるのは、なんと便器だ。INAXライプミュージアムに展示されている美術性の高いデザインを施した古便器コレクションとは異なり、このものは家庭でもおなじみの白い量産品である。衛生陶器が常滑焼であることを日常的に意識している人はあまりいないと思うが、衛生陶器も常滑焼の発展に大きく寄与した存在であることは間違いないし、こうして展示されるとそのフォルムも美しく思えてくる。

2000年代の「これからの常滑焼」のコーナーまでおよそ千年の歴史を辿ったあとは、道具と技術の

ここは、魅力あふれる常滑焼ワールドの入口だ。



場」であるとした。収蔵品には窯業の道具が多かったが、日常的にこれらに触れている市内の窯屋からは、価値があるのかと疑問の声も挙がったとか。しかし長い目で見ると、そうした道具類をこのタイムイングで収集しておいたのは先人の慧眼だったと言えるだろう。また、昭和六十一年（一九八六）には、資料館の活動をサポートする「資料館友の会」も発足している。

そうして市民、研究者、観光客に親しまれ、活用されてきた資料館だが、セントレア開港の平成十七年（二〇〇五）以降は、来館者が年々減少していった。平成二十四年（二〇一二）には隣接する陶芸研究所、研修工房と統合され、とこなめ陶の森として再編成、正式名称も「とこなめ陶の森資料館」となったが、展示内容に大きな変化はなかった。平成二十六年（二〇一四）には、入館者数が過去最低の約一万八千人となり、加えて施設・設備の老朽化も目立つようになってきたので、早急に対策を講じる必要が生じた。

市では様々な課題をクリアすべ

コーナーへ。甕、土管、急須の成形道具が見やすく並んでおり、それらがどのようにして使われるのか理解の助けになるよう記録映像も用意されている。続いては焼成道具と運搬道具のコーナー。そして最後には「街を支える常滑焼」として、土管や埋設ケーブル保護用の多孔陶管（※）が地中に埋設される際の繋げられた状態で置かれ、さらに「暮らしの中の常滑焼」として置物や食器が勢ぞろいしている。これらは、これまでの資料館ではお目にかかるとのなかった近年の製品群で、身近なものが展示されているのが楽しい。展示室の中央には、触って楽しめるアトラクション的な展示が何種類か設けられ、子供はもちろん、大人が体験してみても面白い。

特別展示室を眺めてから、狸の前にある階段を登ってみよう。これまであまりアピールされていなかったが、実は二階には室内バルコニーがあるのだ。ここから展示室を見下ろすと、なかなか壮観である。目の高さには昔の町並みや窯屋の写真が大きく引き伸ばばされて掲

示されており、これらも必見だ。

資料館四十年のヒストリー

この資料館の誕生は、昭和四十年代に行われた窯業道具の収集に端を発する。この事業は、知多市や瀬戸市で民俗資料の収集が進められていたことに刺激を受けた常滑市文化財保護審議会により、昭和四十六年（一九七二）から三年がかりで行われた。中心となったのは、元小学校教員で考古学研究者の杉崎章と、北条の製陶会社⑤社長の村田正雄、それに常滑高校窯業科の生徒たち。市内外の窯業関係者の協力を得て集められた三千点にも及ぶ道具類は資料性の高さが認められ、昭和五十年（一九七五）にそのうちの二六五五点が「常滑の陶



オープンを伝える広報とこなめ

く、平成三十年（二〇一八）に「とこなめ陶の森 資料館 展示リニューアル基本構想」を打ち出す。これに基づいて、今回の館内展示の全面リニューアルが図られたのだ。

次の千年につなげるために

この構想で重視されたポイントのひとつが、子供の来館者に常滑焼の面白さをどう伝えるのか、ということだった。実はここ数年、市民の来館、特に子供が極めて少なかった。これは、学校行事の一環で訪れることがあっても、興味を覚えずに訪しようという親子がほとんどいなかったということである。これを打開するために、子供にもわかりやすく楽しい展示にしなければならぬ。

そこで工夫されたのが触って楽しめる様々な仕掛けやアイテムだ。例えば、中世近世コーナーの甕のいくつかには蓋がされていて、開けるとそこには…ネタバレになるので何が入っているのかはぜひ入館して確かめていただきたいが、そもそも常

器の生産用具製品」として国の重要有形民俗文化財に指定された。

これを受けて、まず昭和五十二年（一九七七）に文化財収蔵庫が大曾公園の隣接地に建設される。同時に展示公開施設の計画も進められ、昭和五十六年（一九八一）四月、現在地に「常滑市民俗資料館」が開館した。昭和四、五十年代は市町村立のミュージアムが相次いで開設された時期で、知多半島でも前後して旧知多町、東海市（平洲記念館）、南知多町、大府市、半田市、武豊町に誕生している。中でも常滑は施設規模や展示・収蔵点数が多く、展示方法や運営など他市町の手本ともいえるべき資料館として注目を集めた。

広報とこなめ第三三四号では、五ページも割いてオープンを大きく報じている。「明日へ生かす郷土の歴史と文化」と題した紹介文の中で、地域に根ざした資料館を目指すことを謳い、その役割を「窯業民俗資料活用のための文化財センター」「博物館機能をもつ社会教育施設」「学校教育の郷土学習の

滑焼の甕は何に使ったの? という素朴な疑問に答えてくれる、実に明快な展示になっている。他にも、甕や井戸筒に見られる「リンズ」の装飾を自分で粘土に付けてみたり、急須のバズルを組み立てて構造が理解できたり、意外なところに招き猫や狸が隠れていたり、工夫が凝らされている。子供でも授業一時間分くらいは集中力を切らず楽しめるのではないだろうか。

大人にとっては、「暮らしの中で生きる常滑焼」が強く意識された展示になっている点も新鮮だ。前述した量産型の便器や多孔陶管、美術品ではない日常用途の器や置物など、かつては資料的な価値をさほど見出されていなかった製品がこうして並んでいるのを見れば、それらも貴重な資料であり、常滑焼が時代とともに変化してきたことが理解できる。また、展示品に添えられた関係者の証言も興味深い。職員はリニューアルの準備を進める中で新たな資料を積極的に収集しており、その過程でやきもの生産に携わってきた多くの人から



聞き取りを行ってきた。ここで紹介されているのはその成果の一部で、製品の背景に人々の暮らしと生産者の思いがあることに気付かせてくれる。

こうした考え方をベースにした展示が、市民にとって身近な常滑焼の魅力を改めて知るきっかけになればと、学芸員の小栗康寛さんは期待している。「今後は、知るだけでなく、作る・使う・買うといった行動につながる企画をやりたいと考えています。新しくなった資料館で常滑焼のことを知ってから、やきもの散歩道や他の施設へ行けば、常滑焼と町との深いつながりがより実感できるのではないのでしょうか」。

そうなればきつと、常滑焼がわが町の財産であることを多くの市民が再認識し、常滑焼の魅力を多くの人に広げたい、未来につなげていきたいという思いも沸き上がってくるはず。新しい資料館は、土をやきものに生まれ変わらせる「窯の火」のように、市民の心に火をつける存在になるだろう。

常滑焼の「つながる千年、ひろがる千年」は、資料館から始まる。

一成形 常滑焼のつくり方

急須をつくる

Making teapots

急須は、胴体・蓋・茶こし・ほき口・取っ手という複数のパーツを組み合わせてつくりまわす。ほき口や取っ手の位置・角度で使いやすさが大きく変わるため、高い技術が必要です。

Teapots are made by combining four parts: the body, lid, tea strainer, and handle. The position and angle of the spout and handle determine how easy it is to use. The particular teapot will be. Making teapots therefore requires high expertise.



※1 2019年10月号「常滑井戸筒談義」参照
※2 2021年7月号「電線管ハウスを知っていますか?」参照